紅会ノ報

第 68 号
2022年5月1日発行

マザー・マチルドらを迎えた港は　今も多くの人が行き来する。

「田毎の月」がつなぐもの

紅会名誉会長
中学高等学校校長　藤原 恵美

今から150年前、1872年6月28日、マザー・マチルドが横浜に到着されました。来日した最初のカトリックの修道女であり、「神の愛」を日本の子どもたちに伝えたいという情熱をもって、雙葉の礎を築かれました。その熱誠は、同窓生を中心とする雙葉ファミリーの中に脈々と受け継がれ、皆様がそれぞれの場で、それぞれの形で発揮されていることを嬉しく思います。時代につれて学校も生徒たちも変わっていきますが、教育の根の部分であるキリスト教と幹の部分である校訓と教育理念は変わらずにあることは大きな安心です。

さて、変わらず受け継がれている教育活動のひとつは「田毎の月」です。毎年運動会で高校3年生が披露するダンスです。昭和25年、1950年の運動会から始まり、以来71年間、途切れることなくバトンをつないできました。実は、コロナ禍のもと、運動会も中止となりました。一昨年は手をつなぎ、「密」になるダンスは心配だとの声があり、観客なしのクラス単位の発表となりました。それでもバトンがつながれたことに深く安堵しました。今年は、高3保護者をお迎えし、高校生は運動場で中学生はライブ配信で、厳粛な雰囲気の中、演技を見守りました。翌日の全校朝礼での生徒のお祈りは「雙葉生としての誇りとあるべき姿を示してくださいました」で始まっており、雙葉の精神を引き継いでくれたことを確信しました。70年経っても大切なことは変わらないことに感慨を覚え、「そうか、これが伝統なのだ」との思いを新たにしました。

今しばらくは予測困難、混迷、変動の時代が続くでしょう。卒業生の皆様には、どんな状況にあっても、巻き込まれず、浮足立つことなく、過度に不安になることなく、伝統に裏打ちされた誇りと自信をもって、神様からいただいたタレントを発揮し、周りを照らす「光」であり続けていただきたく心から願っています。